

Q. 17 ユニバーサルデザインを意識した授業とは、どのような授業ですか。また、具体的な工夫例を教えてください。

A. ユニバーサルデザインとは、すべての人が利用しやすく、暮らしやすいように、ものづくりやまちづくり、環境づくりを行うという考え方です。この考え方を授業に取り入れるということは、クラスの中のすべての子どもにとってわかりやすい授業を行う、ということになります。つまり、特別な支援を要する子どもに配慮した授業づくりをしていくことが、学級のすべての子どもにとってわかりやすい授業となると考えることができます。

○見通しをもたせる工夫

先が見えない状況や曖昧な状況に弱い子どもにとっては、1時間の授業の流れや次にすることがわかることで、見通しがもて、安心して課題に取り組むことができます。その場合、次のような目に見えるようにする工夫（視覚化）を行うことが大切です。

◇授業の初めに学習する内容の進め方について全体的な見通しを提示する

1時間の学習の流れを黒板の同じ場所に板書したり、事前に紙に書いて作っておいて、黒板に貼ったりすることなどの工夫をしましょう。ある程度パターン化されていて、いつも出てくる内容については、マグネットシートなどを常時使って、貼ったり取ったりすることもできます。

◇授業の進行場面がわかるようにする

授業展開の中のどの場面なのかがわかるようにしましょう。例えば、授業の流れを板書した横にマグネットなどを付け、内容が進むにつれて、それを目印として移していくということもできます。

また、時間配分を目に見えるようにして、時間の区切りを明確にする必要もあります。作業や学習課題に取り組む場面で、「区切りのよいところでやめなさい」「そろそろやめなさい」というような指示では、なかなか終われないということが起きてしまいがちです。区切りを明確に示すにはタイマーなどの活用が有効です。

○情報伝達の工夫

◇指示・伝達事項は聴覚的・視覚的に提示する

聴覚認知（耳から入ってくる事柄の情報処理）や視覚認知（目から入ってくる事柄の情報処理）、記憶（入ってきた情報を保持しておくこと）などの『かたより』から、学習上のつまずきが生じる子どもがいます。例えば、視覚認知にかたよりのある子どもには、漢字の習得の困難さがみられたり、聴覚認知にかたよりのある子どもは、指示を聞き落とすことが多発する場合があります。

こうした特徴のある子どもに対しては、情報がいろいろな感覚から入るように工夫する『多感覚刺激』という方法が有効です。特に、授業は聴覚情報を中心に組み立てられていますので、情報の視覚化を意識するとよいでしょう。また、板書やICT等を活用して、視覚的にわかりやすい提示をすることも効果的です。

【Q. 13 参照】

◇具体的な表現で伝える

例えば、音楽の指導で教師が「ちゃんと歌いましょう」と指示しても、どういう状態が『ちゃんと』しているのかが子どもにはわかりません。大きな声を出して歌うのか、姿勢を正しくして歌うのかなど、具体的に指示する必要があります。

また、今すべき活動がはっきりとわかるように、1回に1つの発問や指示をすることや、簡潔な話し方を意識することも大切です。【Q. 9、Q. 10 参照】

○授業への参加を促す工夫

わからないことがあった時に、質問したくてもできない子もいます。机間指導は、個別に支援をするチャンスです。わからない時のハンドサインを決めておくなど、教師からの助言を受けやすくする工夫があると、子どもには「手助けしてもらえる」という安心感が生まれるでしょう。また、文字がぎっしり並んだ教科書を目で追いながら読むことが苦手な子どもには、1行分の大きさに合わせて切り抜いた補助具を活用することで読みやすくすることもできます。

発表の場面において、なかなか発表することができない子には、ペア学習やグループ学習を取り入れて自分の考えを発表し合える場面を設定したり、よいつぶやきを教師が取り上げたりして発言に結び付けることもできるでしょう。逆に自分の思いばかりを発表したがる子どもには、どのようなルールで発表できるかなどを説明し、その行動を定着させることも必要です。

注意力の持続に課題が見られる子には、次にすることが用意されているなど、課題の内容や進め方に少しずつ変化をもたせることも十分な支援になります。注意が散漫にならないために、視界に配慮して学習に関係のない掲示は外したり、カーテンを閉めたりすることもあるでしょう。

○学習課題への取組を促す工夫

授業では、多くの情報から大事なことを見つけたり、関連を理解したりする活動があります。情報を処理・整理したりすることが苦手な子どもにとっては、ワークシートを活用して学習の進め方や段取りなどがわかりやすくなるような工夫がされていると、困り感をカバーすることができます。【Q. 15 参照】

また、1つの学習課題を解決するために、課題を細分化して、同じ課題でも易しい内容から難しい内容への段階を増やし（スモールステップ化）、無理なくクリアしていけるように学べる場を用意したいものです。課題に対して強い苦手意識をもっていたり、自信をなくしていたりする子には、学習課題そのものを拒否することもあり得ます。課題をスモールステップ化し、段階ごとに「できた」という達成感をもたせることが学習への意欲にもつながります。

一人の子どもにかかりきりになってしまい、結果として学級全体の指導ができにくくなるケースが見られます。子どもが落ち着いて学習活動できる基盤づくりとともに、ユニバーサルデザインを意識して授業改善を図っていききたいものです。

